

〔研究所記事〕

1986 年度 研究会記録

第 1 回 (5 月 21 日)

賀 川 光 夫

「考古学からみた日中交流」

昨年度 11 月下旬より 2 週間、中国の天津社会科学院の招聘を受け、中国における日本研究諸機関及び日本研究者等との学术交流を行った際の報告を終えた後、本題の「考古学からみた日中交流」について特別講義を行った。

賀川教授の報告によると、中国において、政府直轄市と各省に独立した科学院と社会科学院がそれぞれ設置され、さらに直轄市及び各省の社会科学院と主要大学の文系学院に日本研究所が設置され、各分野別に全国組織の学会があるという。

例えば、直轄市の一つ、天津市には、科学院(所員・事務員合わせて 400 名)と社会科学院(300 名)の 2 つがあり、後者には所員 24 名の日本研究所(呂万和所長)があって、各分野の研究がそれぞれ行われている。直轄市と各省の日本研究所は、天津とほぼ同じであり、これに主要な大学の日本研究所を加えると、日本研究(政治、経済、文化、歴史)に当る研究者の数は大変多い。それぞれの日本研究所では、その成果を集録する研究誌や機関誌も発行され、例えば、遼寧大学の日本研究所(任鴻章所長・近現代史)では、「日本研究」と題する機関誌を発行している。その内容は、経済、歴史、文化と文学の 3 部門からなり、戦後日本の科学技術の発展や李鴻章の対日外交問題、及び井原西鶴や川端康成などの文学に及び幅広い研究がなされているようだ。

ところで、賀川教授は、中国滞在中、遼寧大学(瀋陽)、南開大学(天津)、復旦大学(上海)、上海大学、上海博物院などで、八回に及ぶ特別講義及び討論会を行った。各大学で司会の役を務めてくれたのは、任鴻章教授(遼寧大)、呉延珍教授(南開大)、呉傑教授(復旦大)などであるが、それぞれの会場の聴講参加者は、日本研究所員や文系史学専攻の教員及び大学院生で、熱心な学習態度であった。その内容は、「弥生遺跡出土の後漢鏡の問題について」と「大分県宇佐虚空蔵寺出土の博仏について」及び「日本における農耕の起源について」の 3 題であるが、何れにおいても「考古学からみた中・日交流」の問題に焦点があてられた。

今回の研究会においては、その中の「弥生遺跡出土の後漢鏡の問題について」1 題のみ報告を行った。賀川教授は、日本における弥生遺跡から出土する前漢鏡・後漢鏡などを含め、仿製鏡の一般的問題について説明したのち、九州出土の鏡、及び破片鏡の出土・分布状況や、さらに鏡片の加工状況とその分布状況などの問題に言及、弥生終末期の村落共同体や邪馬台国卑弥呼の存在に深く関ると考えられる示唆に富む有意義な内容であった。

なお、賀川教授の滞在中、天津社会科学院の王金林主任が、天津・瀋陽・上海と全行程同行された。(仲嶺真信)

第 2 回 (9 月 24 日)

坂 田 邦 洋

「考古学と統計学」

考古学は遺跡の発掘に始まる。発掘された遺物は水洗・整理される。整理を終えた遺物はいよいよ考察ということになるわけであるが、出土数の多・少、遺物の大・小、長・短など、量の変遷と形の変化は考古学にとって最も重要視されている。